

ストレス状況に置かれた生徒に対する「生徒指導」方法

達成動機，対処方略，および適応の関係を基に

Methods of Pupil Guidance in Stressful Situations The Relationship between Achievement Motivation, Coping Strategy and Adjustment

樋口康彦

HIGUCHI Yasuhiko

Abstract

The purpose of this study is :(1) to investigate the relationship between coping strategy and adjustment among mentally healthy subjects in stressful situations, and ;(2) to investigate the relationship between achievement motivation, coping strategy and adjustment in the same situations. One hundred and fifty-four male high school students were selected as subjects, and these data were collected by means of questionnaires.

As the result of analysis, the next knowledge was obtained:

1. Concerning the relationship between coping strategy and adjustment, active engagement are closely related to high adjustment, but passive acceptance and escapism aren't related to adjustment. And the relationship between self-examination and adjustment and between seeking support and adjustment are at the mercy of stressful situations' trait.
2. As a whole, in stressful situations high achievement motivation leads to effective coping strategy, and as the result of that process adjustment is brought on. But low achievement motivation leads to ineffective coping strategy, and as the result of that process adjustment isn't brought on.

Key words : stressful situation, achievement motivation, coping strategy, adjustment

目的

一般に、人はストレスを認知すると、それによりもたらされる葛藤、不安、不満を取り除こうとしたり、また軽減しようとする。その際に用いられる様々な方法はストレス対処方略と呼ばれ、精神的健康・適応と深く関係していることが多くの研究により確かめられている(Folkman, 1984; Jemmott & Locke, 1984)。

ストレス状況における、対処方略と適応の関係についての研究は、従来、主に精神病患者に焦点が当てられてきており、彼らの対処方略とそれに付随する病理的な不適応についての研究が数多くなされてきた。しかし、健常者を被験者に用いた研究に関してはそれほど多く積み重ねられてきているとは言えず、そのことについて以前になされた梶田(1970)の指摘は現在もそのまま当てはまると言える。そこで、対処方略と適応の問題についてのより一般的な法則を導くためには、臨床的にとらえられるべき特殊なケースの研究ばかりでなく健

常者のレベルでこれら2変数の関係を明らかにしていくことが求められるであろう。

また、従来、健常者を用いた研究においても、実際に自分の身に起こったストレス状況について被験者に自由に想定させた結果を基に、つまり被験者ごとに異なる状況について思い浮かべて回答した結果を基に対処方略と適応の関係についてとらえるという方法がよく用いられてきた(坂田, 1989)。しかし、効果的な対処方略は場面によって異なり、それゆえに共通の場面を作成するほうが方法論的により有効であるということが考えられるのではないだろうか。例えば両親の死に対する対処方略として趣味に打ち込むことは適応につながる効果的な対処方略となるであろう。しかし、成績不振に対する対処方略としてはそうならないであろう。そこで、場면을特定した研究を行うこともまた必要であると思われる。

それから、個人の用いる対処方略に影響を与える心理的要因について、つまり効果的な対処方略をとらせる心理的要因は何か、あるいは効果的でない対処方略を取らせる心理的要因は何かということに関する研究の蓄積は非常に乏しいと言え、国内の文献においてはほとんど見あたらない。しかし、対処方略と適応という2変数間の関係だけでなく、対処方略に影響を与える心理的の先行要因、対処方略、そして適応という3変数間の関係を場面ごとに明らかにしていくことにより、現在ストレス状況に直面している人、あるいは今後ストレス状況に遭遇することが予想される人に対する有効な介入または準備ができるのではないだろうか。つまり、もし不適切な対処方略や不適応につながる心理的要因が何なのかがわかれば、それを変えるための手段をとることができるのである。例えば、エンカウンター・グループ、Tグループ、動機づけ訓練等は個人の考え方、帰属様式、動機づけ等を適応につながる効果的な対処方略を取らせるよう変化させる有効な手段になりうると思われる。そこで、上の3変数間の関係を解明するための研究が望まれるであろう。

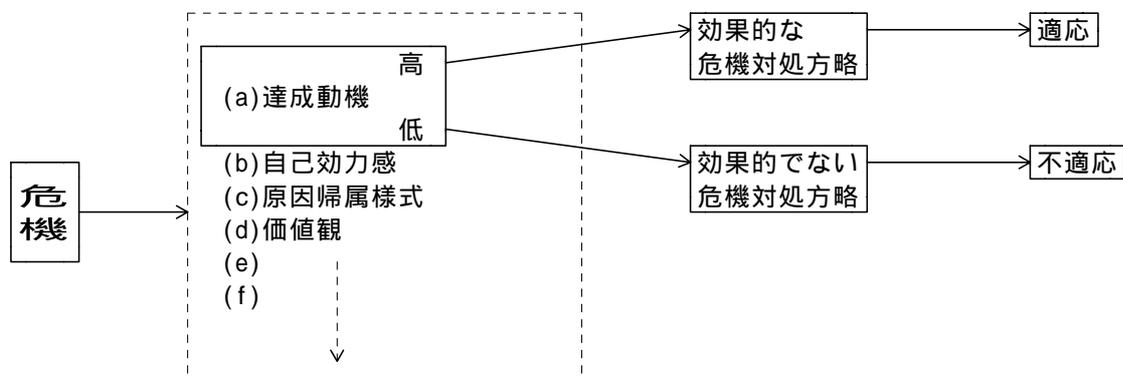


Figure 1 危機場面における3変数の関係モデル

さて、個人がストレス状況下において用いる対処方略に影響を与える要因としては、Figure1 に示すように様々なものが考えられるが、今回は以下に述べる理由から達成動機を取り上げることとする。達成動機とはMurray(1938)の定義に従うなら、対人的なことも含めて自己を取り囲む総合的な環境に働きかけ、その環境を自らの力で統制し、適応を得ようとする力ととらえることが可能である。そして、対処方略とは各場面ごとに達成動機が具体的な手段として現象化したものであり、適応とはそのようなプロセスの結果得ることのできる、自己と環境間における好ましい関係の保持であるというふうにとらえることができるのである。実際、ストレスに満ちた危機的場面はミクロ的視点から見ると個人を不安に陥れ不適応へと導く可能性のある望ましくない状況であり、当事者にとってはできれば逃げ出したいと感じる状況であろう。しかし、それをマクロ的視点

から見るなら、新しい行動パターンの取得、人間としての成長の機会を含んでいる状況であり、達成動機を試され、それを発揮しなければならない状況であるととらえることができるのである。そこで、Figure1 の中でも達成動機は対処方略と特に深い関係を示す先行要因のひとつであることが予測でき、適応との詳細な関係の解明が求められていると思われる。

以上のことを踏まえ、本研究では以下の2点について明らかにするため調査を行う。

問題1 これまで被験者として用いられることが少なかった健常者を被験者に用い、かつストレス状況を特定した上で、それが生じた際どのような対処方略を用いることが適応につながるのか、について検討する。

問題2 ストレス状況が生じた際、達成動機という心理的変数が先行要因となって効果的な対処方略を導き、その結果適応にいたる、という一連の影響の流れ(Figure1 のモデル参照)の存在を裏付ける結果が得られるかどうかについて検討する。またその影響の流れの詳細について、ストレス状況ごとに検討を行う。

方法

予備調査

今回の被験者に対して適用可能な質問項目を作成するため私立A高校の生徒44人(本調査と同様に、全員が3年生である)に対し予備調査を行った。質問項目は、以下の3つであり、全て自由記述方式で回答するよう求めた。

1. やる気のある生徒の行動特性 達成動機測定項目を作成する際、参考にするため行った。「みなさんの周りには、なにごとにもやる気をもって積極的に取りくむ生徒と、なにごとにもやる気がなく消極的な生徒がいると思います。みなさんの目から見て、やる気のある生徒には、どのような行動特徴がありますか。思いつかれたことを、箇条書きで、できるだけたくさんお書きください。」という教示を与え回答を求めた。積極的な生徒の行動特徴としては、「勉強でわからないことがあったら理解できるまで取り組む」、「なにごとにもきちんとしている」、「リーダーになってみんなを引っ張っていく」、「リーダーシップを発揮する」、「物事を計画的に進める」、「どんなことにでも人に負けないようにがんばって取り組む」、「将来の目標を持って、それに向かって努力して生きている」などの回答が挙げられた。得られた記述は全てKJ法を用いて分類した後、質問項目の形式に改め、達成動機測定項目作成の際のアイテムプールとした。

2. やる気のない生徒の行動特性 「今度は、逆に、やる気のない生徒には、どのような行動特徴があると思いますか。思いつかれたことを、箇条書きで、できるだけたくさんお書きください。」という教示を与え回答を求めた。回答としては、「テストの点が悪くても気にしない」、「いつもだるそうにしている、自分からなにもしようとせず、他人まかせである。」、「根気がない」、「臆病で、挑戦的でない」、「なにごとにもいい加減である」、「楽をすることばかり考えている」などが挙げられた。得られた記述は「1. やる気のある生徒の行動特性」と同様のプロセスを経て、達成動機測定項目のふたつめのアイテムプールとした。

3. 最近起こった「困った出来事」 「あなたの身に、最近起こった『困った出来事』にはどのようなことがありますか？例にならって、できるだけ多くお書き下さい。」という教示を与え回答を求めた。「成績が下がり、先生、親から注意を受けたが、いくらがんばっても成績が上がらない」、「友達とけんかをして、顔を合わすのが気まずい」、「最近、今までの遊び友達たちと興味の対象が異なってきて、話が合わなくなってきた」、「クラブで、責任の重い役に選ばれてしまった」などの記述が挙げられた。得られた記述は全て「1. やる気のある生徒の行動特性」、「2. やる気のない生徒の行動特性」と同様のプロセスを経て、ストレス場面作成の際のアイテムプールとした。

4. 上の「3」のことが起きた時どのように対処したか 「そのとき、あなたは、その『困った出来事』に対

して、どのように対処しましたか。あなたがその時とった行動について、できるだけ多くお書き下さい。」という教示を与え回答を求めた。回答としては「他の人に相談し、アドバイスを求めた」、「あまり悩みすぎないように気をつけた」、「気分転換をして、心を落ち着けた」、「必死で勉強に取り組んだ」、「無気力になって落ち込むだけで、なにもしなかった」、「役目を果たせるように、自分を変えていった」、「自分のだらしなさを反省して、事態を改善しようとした」、「悩んでもどうしようもないことなので、音楽を聴いて忘れようとした」などがあった。得られた記述は全て「1. やるきのある生徒の行動特性」 - 「3. 最近起こった[困った出来事]」と同様のプロセスを経て、ストレス対処方略測定項目作成の際のアイテムプールとした。

本調査

調査時期 1994年7月。

被験者および調査方法 関西地方に所在する私立A高校の生徒、計154人(平均年齢=17.4歳, SD=0.5)。全員が3年生の男子である。なおA高校は卒業生のほとんどが大学に進む進学校である。今回、被験者として高校生を用いた理由としては、以下のことが挙げられる。それは、これまでわずかながら行われてきた健常者を用いた研究においても、その被験者としては主に産業組織体の従業員が用いられてきており、青年期に焦点を当てたものはきわめて少なかった。しかし、従業員と彼らに特有の仕事、職場に関するストレスについてだけでなく、被験者として青年期の若者を用い、この時期に特有の発達にともなうストレス状況と他の様々な変数との関係について見てみることも興味深いと考えたからである。調査方法としては留置法を用い、質問紙をホームルームの時間に配布し自宅に持ち帰らせ、後日回収した。

質問項目の構成

1. ストレス場面 高校生にとって日常よく経験するちょっとした事件、しかし、圧力・緊張を体験し、それを解消するために通常の生活以上の努力を迫られると仮定できる場面を作成することにした。提示する場面としては、一般的でない(めったに体験することのない)ものはリアリティーの問題から避けることにした。予備調査の結果、高校生が日常よく経験している身近なストレス場面としては、(a)友人とのトラブル(友人場面)、(b)学校生活におけるトラブル:自分の能力を超えているような責任の重い役を任せられるなど(学校場面)、そして高校3年生という状況から(c)成績の不振による進路の不安定(進路場面)、であることがわかったので、これら3つのストレス状況を表す場面を以下のように作成した。(a)友人場面:仲良しグループで遊んでいるとき、ちょっとしたことで他のメンバーと意見が対立し、言い争いになりました。それ以来、あなたはグループのみんなから口をきいてもらえなくなり、すっかり孤立してしまいました。(b)学校場面:あなたはクラスの代表として文化祭の準備委員会に出席しました。そこであなたは、文化祭の「成功・失敗」を左右するようきわめて重要な役に選ばれてしまいました。(c)進路場面:進路についての面接のとき先生から「君の成績はあまりかんばんしくなく、このままでは希望している大学への進学は非常に難しいだろう。」と言いわたされました。

今回用いられた場面は、高校生なら誰もが遭遇する可能性のある類似した多くの場面をあるひとつの場面に代表させる形で表したひとつの象徴である。そこでどのような対処を行うのかを見ることにより、ある個人のあるストレス場面における対処のパターンを把握して、そのパターンと達成動機あるいは適応がどう関係しているのかについて調べるといった目的のために作成されたのである。

2. 達成動機測定項目 予備調査で得られた結果の他、Jackson, Ahmed, & Heapy(1976), Cassidy & Lynn(1989)および樋口(1995a, 1996a)の達成動機の多次元説を参考に項目の作成を行った。具体的には、高校生が抱いていると思われる達成動機を測定するために重要な次元として(a)将来における成功に対する動機[Table内で表すときにはFと略, 以下同]、(b)挑戦に対する動機[CH]、(c)イニシアティブに対する動機[I]、(d)継続に対する動機[S]、(e)競争に対する動機[CO]、(f)活動の合理化に対する動機[R]、(g)学習に対する動機[L]の7次元を設定し、各次元につき6つずつ項目を作成した。そして、非常によくあてはまる(5点)、あて

はまる(4点), どちらともいえない(3点), あてはまらない(2点), 全くあてはまらない(1点)までの5件法で回答を求めた。計42項目。

3. ストレス対処方略 本論では, 道具的行為だけではなく認知的な努力も含めて, あるストレス場面より受ける圧力から解放されるために個人が行う行為の全般をストレス対処方略として取り扱う。そこで予備調査の結果とMcCubbin, Dahl, Lester, Benson, & Robertson(1976), Folkman, Lazarus, Gruen, & DeLongis(1986), Latack(1986), Aldwin & Revenson(1987), Cohen(1987)等の研究結果を参考にストレス対処方略として(a)積極的取り組み[Table内で表すときにはAと略, 以下同], (b)発想の転換[C], (c)忘却[0], (d)消極的受容[P], (e)逃避[E], (f)反省[SE], (g)サポートの要請[S], の7次元を設定し, 各次元につき4つずつ項目を作成した。そして, 非常によくもちいる(5点), もちいる(4点), どちらともいえない(3点), もちいない(2点), 全くもちいない(1点)までの5件法で回答を求めた。計28項目。なお被験者は3場面ごとに回答を求められるため計84項目に対し回答することになる。

4. 適応 本論においては適応を, 自己と環境間における好ましい関係の保持としてとらえ, 大野(1984), 坂柳・竹内(1986), 内藤・浅川・高瀬・古川・小泉(1987), 一谷・相田・水谷(1990), 二宮・大野(1990)等を参考に友人・学校・進路というそれぞれの場面における適応(脚註1)状態を表す質問項目を3つずつ作成した。達成動機と同様, 5件法で回答を求めた。計9項目。

結果と考察

分析1 達成動機測定項目の因子分析

質問項目の構造が当初の設定通りになっているかどうかを確かめるため, 実際に因子分析を行った。なお, 共通性の推定は主軸法によった。スクリーテストおよび因子数を変えての分析結果の内容を参考に最適な因子数を探ったところ, とともに最適解を得たのは因子数を5にしたときであった。ちなみに第1因子までで全分散の44.7%が説明可能であり, 因子数を6にした場合は全分散の49.1%が説明可能であった。次に, 因子負荷行列をバリマックス法, 斜行プロマックス法によって回転させた。因子間の一部には, 中程度の相関が見られたため, 解釈に当たっては斜行プロマックス解を採用した。結果はTable1に示す通りである。項目選択の際は, 因子負荷量が.4以上で他の因子に対する負荷量が.3以下であることを基準とした。以下, 因子の解釈を行う。

第1因子 項目番号「37. 難しいことにぶつかったら, すぐにあきらめてしまう。」「01. どんなに難しくても, いったんやり始めたことには最後まで取りくみたい。」「02. 失敗の可能性が高くても, 新しいことにどんどん取りくんでいきたい。」「41. 簡単にできる課題よりも, 他の人にはなかなかできないような難しい課題に挑戦してみたい。」等が高い負荷を示している。一見してわかるように第1因子には, 継続に対する動機として設定した項目と挑戦に対する動機として設定した項目とがひとつにまとまっている。しかし内容をよく検討してみると, そこにはある課題に対して積極的に取り組むことに関する共通の概念が見て取れる。そこで「課題への取り組み」に対する動機の因子と命名する。ちなみに, 継続と挑戦が課題への取り組みとしてひとつにまとめるのは, 樋口(1995a, 1996b)が大学生に対し行った調査結果と同じである。

第2因子 項目番号「38. なにをするときでも, 自分がみんなを引っばっていきたい。」「06. いろいろな活動で, リーダーになりたい。」等が高い負荷を示している。この因子に負荷の高い項目は全て当初から「イニシアティブ」に対する動機測定項目として設定していたものであり, 何かの活動を行う際には他の人の指示に従って行うのではなく自らの考えで推し進めていきたいという動機を表している。そこで「イニシアティブ」に対する動機の因子と命名する。

第3因子 項目番号「09. よい成績を取るために, もっともっと勉強したい。」「10. 学校の勉強より, 自分の興味があることに力をそそぎたい。(マイナス負荷)」等が高い負荷を示している。この因子に負荷の高い項目

Table 1 達成動機測定項目の因子分析結果

項目内容	因子負荷量					相関係数
37. 難しいことにぶつかったら、すぐにあきらめてしまう。(S)	.689	.007	-.076	.040	.002	.616
01. どんなに難しくても、いったんやり始めたことには最後まで取りくみたい。(S)	.654	-.195	-.061	.079	.061	.519
17. 難しいことにぶつかると、努力を続けるより、「もう、どうでもいい」という気になって簡単にあきらめてしまう。(S)	-.614	-.050	-.153	.144	-.050	.578
25. 他の人が嫌がるような難しいことにも、根気強く取りくみたい。(S)	.602	.041	.053	-.167	-.020	.590
12. 一度やりはじめたことは、最後までやり通さないと気がすまない。(S)	.599	-.058	-.050	.030	.095	.500
02. 失敗の可能性が高くて、新しいことにどんどん取りくんでいきたい。(CH)	.556	.225	-.007	-.032	-.246	.499
30. 私は、なにごとにも我慢強く取りくみたい。(S)	.549	.062	.199	.000	.148	.521
41. 簡単にできる課題よりも、他の人にはなかなかできないような難しい課題に挑戦してみたい。(CH)	.522	.038	.011	.184	-.013	.465
20. 私は、いろいろなことに挑戦しようとする意欲にあふれている。(CH)	.485	.150	-.057	.227	-.183	.445
22. 自分の能力を向上させるために、今までやったことがないことにも進んで取りくみたい。(CH)	.437	.200	-.006	.256	-.013	.443
34. 私は、複雑で困難なことに挑戦するよりも、自信を持って気軽にできることをするほうが好きだ。(CH)	-.434	.202	-.174	.184	.003	.358
15. 自分のプラスになるなら、難しいことにも積極的に挑戦していきたい。(CH)	.527	.131	-.161	.321	.065	
13. 私は自分の責任で仕事を推進していくより、人の指示に従うほうが好きだ。(I)	-.375	-.249	.155	.000	.036	
33. 勉強でわからないところができたら、先生に質問に行ったり自分で調べたりして完全にマスターしたい。(L)	.348	-.073	.006	.155	.309	
38. なにをするときでも、自分がみんなを引っばっていききたい。(I)	.059	.765	-.041	.067	.079	.796
06. いろいろな活動で、リーダーになりたい。(I)	.061	.731	.252	.017	-.079	.689
19. 私の所属している集団が何か計画を立てるとき、私は他の人に計画を立ててもらい、自分でリードしたい。(I)	.143	.719	-.125	-.051	.047	.663
29. 先頭立って集団をまとめなければならないような立場に立つのはいやだ。(I)	-.109	-.700	-.020	.062	-.053	.645
23. 他の人に命令を下し、自分で物事を押し進めていくのが好きだ。(I)	-.151	.658	-.040	.219	-.002	.580
28. 将来、何かの分野で第一人者になりたい。(F)	-.104	.239	.183	.131	.096	
09. よい成績を取るために、もっともっと勉強したい。(L)	.164	-.120	.556	.291	.130	.464
10. 学校の勉強より、自分の興味があることに力をそそぎたい。(L)	-.043	.294	-.542	.020	.157	.404
40. 私は、勉強なんてどうでもいいと思っている。(L)	-.273	.027	-.540	-.002	-.164	.395
27. テストでよい点数を取るためなら、睡眠時間を削ってでも勉強したい。(L)	.233	-.104	.515	.187	-.118	.465
16. 私は、出世のことなど気にせず自分の道を行きたい。(F)	.400	-.017	-.647	.013	-.040	
04. 将来は、人から尊敬されるような立派な地位につきたい。(F)	-.262	.300	.589	.104	.029	
03. 私は、勉強のためなら遊びを我慢できる。(L)	.325	.103	.498	-.260	-.115	
08. 世に出て成功した人を見ると、「自分も将来こんな人になりたい」と思う。(F)	-.168	.311	.485	.058	-.140	
42. 将来、何か価値のあることを成し遂げたい。(F)	.193	-.083	.442	-.312	.077	
07. 私は、自分と同じことを目指す人が多ければ多いほど、より多くの努力をする。(CO)	.154	.259	.335	-.029	.056	
05. 無駄な時間を過ごしていると、イライラしたり不安になったりする。(R)	.021	.160	.266	.165	.231	
31. 私は、楽しむためのゲームをしているときですら、すぐ競争的になってしまう。(CO)	-.047	.042	-.067	.625	-.058	.518
11. たとえ全力を尽くしても、その結果が他人よりも劣っていれば満足できない。(CO)	-.106	.072	.002	.596	.092	.516
21. 「他人との競争を避けるような人はだめな人だ」と思う。(CO)	.126	.025	.046	.573	-.234	.348
36. 人と競争して負けても、あまりくやしいと感じない。(CO)	-.168	-.040	-.127	-.555	.031	.438
26. 私は、「他の人にまけたくない」という気持ちが高い。(CO)	.168	.081	.094	.539	.146	.519
35. 社会的地位の低い者として生きていくことは、屈辱的なことだと思う。(F)	-.365	-.195	.286	.492	-.002	
32. 何かをする前には、細かいところまできちんと計画を立てておきたい。(R)	.035	.084	.068	-.092	.746	.637
14. 何かをする前には、それをうまくやるための方法についてよく検討する。(R)	-.124	.098	-.087	-.094	.742	.568
24. 何かをする前にはまず、「どうすればもっとも効率よくできるか」について考える。(R)	-.071	.000	.009	.106	.720	.547
18. 何かをするときには、計画を立てず行き当たりばったりにする。(R)	-.086	-.057	-.022	.251	-.628	.475
39. 効率よく活動できるように、自分の生活を整えておきたい。(R)	.180	-.171	-.079	.298	.481	.331

		因子間相関					
因子名							()
第 1 因子	課題への取り組み	1.000					.855
第 2 因子	イニシアティブ	.155	1.000				.856
第 3 因子	学習	.142	-.015	1.000			.650
第 4 因子	競争	-.024	.240	.019	1.000		.707
第 5 因子	活動の合理化	.139	-.022	.146	.068	1.000	.746

は全て当初から「学習」に対する動機測定項目として設定していたものであり、勉強に対して積極的に取り組むことに対する動機を表している。そこで「学習」に対する動機の因子と命名する。

第 因子 項目番号「31.私は、楽しむためのゲームをしているときですら、すぐ競争的になってしまう。」、「11.たとえ全力を尽くしても、その結果が他人よりも劣っていれば満足できない。」等が高い負荷を示している。この因子に負荷の高い項目は全て当初から「競争」に対する動機測定項目として設定していたものであり、他者との競争を志向することに関する内容を表している。そこで「競争」に対する動機の因子と命名する。

第 因子 項目番号「32.何かをする前には、細かいところまできちんと計画を立てておきたい。」、「14.何かをする前には、それをうまくやるための方法についてよく検討する。」等が高い負荷を示している。この因子に負荷の高い項目は全て当初から「活動の合理化」に対する動機測定項目として設定していたものであり、何かを行うにあたっては、無計画に行うのではなく、きちんと計画を立て、自らの精力を合理的に注ぎ込みたいという動機を表している。そこで「活動の合理化」に対する動機の因子と命名する。

Murray(1938)は達成動機の定義として(a)困難なことを成し遂げること、(b)自然物・人間・思想に精通し、それら进行处理し、統制すること、(c)障害を克服し、高い水準に到達すること、(d)自己を超越すること、(e)他者と競争し、これを凌ぐこと、(f)才能をうまく使い、自尊心を高めること、という基準を示している。因子分析の結果抽出された各5次元は、上に示された(a) - (f)の基準のいずれかあるいは複数に該当し、Murrayの定義する達成動機概念に即したものであると言えるだろう。

それから、次に尺度の妥当性に関する検討を行った。具体的には、まず最初に、当初設定した構造と因子分析で得られた構造との関係を見てみた。その結果、これらふたつはほぼ一致しており、理論的に矛盾する結果は示されていないことを確認した。その後、採用された項目が命名した5つの因子名を正しく反映しているかどうかについて、社会心理学専攻の5人の大学院生に、非常によく反映している(5点)、やや反映している(4点)、どちらともいえない(3点)、あまり反映していない(2点)、全く反映していない(1点)までの5件法で判定するよう求めた。その結果、5人の判定の平均得点はいずれの項目においても4.0を超えており、妥当性は保たれているとした。

また次に、尺度の信頼性に関する検討を行った。まず、Table1の右端には樋口(1995a)に倣い「当該の項目の尺度得点」と「その項目以外の尺度得点の総和」との相関係数の値が因子ごとに示されている。求められた相関係数はいずれの因子においても高い値を示し、全て $p < .01$ 水準で有意であった。またTable1の右下には係数も示されているが、いずれの因子においても高い値が得られている。これらの結果から尺度の信頼性も保たれているとした。

分析2 ストレス対処方略測定項目の因子分析

質問紙の構造が当初の設定通りになっているかどうかを確かめるために、達成動機測定項目と同様の手続きで462行(被験者数154×場面数3)のロー・データに対し因子分析を行った。結果はTable2に示す通りである。なお、第 因子までで全分散の60.4%が説明可能であり、因子数を6にした場合は全分散の64.0%が説明可能であった。以下、因子の解釈を行う。

第 因子 項目番号「09.『このような事が起こったのは仕方のないことだ』と自分に言いきかせる。」、「16.『このことはたいしたことがないことだ』と自分に言いきかせる。」、「19.『どうしようもない』と考え、あきらめる。」、「18.できるだけ早く忘れようとする。」等が高い負荷を示している。一見してわかるように、この因子には発想の転換として設定した項目と消極的受容として設定した項目、そして忘却として設定した項目がひとつにまとまっている。しかし項目内容をよく検討してみると、そこには問題解決から目をそむけ消極的に受容することに関する共通の概念が見て取れる。そこで第 因子は「消極的受容」の因子と命名する。

第 因子 項目番号「15.このような事態をまねいた自分の未熟さを悔やむ。」、「02.こうなったのは自分の責任だ、と反省する。」等が高い負荷を示している。この因子に高い負荷を示している項目は全て、反省測定項

Table 2 ストレス対処方略測定項目の因子分析結果

項目内容	因子負荷量					相関係数
09. 「このような事が起こったのは仕方のないことだ」と自分に言い聞かせる。(C)	.675	.138	-.131	.252	.001	.624
16. 「このことはたいしたことがないことだ」と自分に言い聞かせる。(C)	.674	-.123	-.052	.111	-.065	.702
26. 「このことは自分にとってそれほど重要なことではない」と考えるようにする。(C)	.623	-.157	.011	-.029	-.039	.788
19. 「どうしようもない」と考え、あきらめる。(P)	.553	-.120	-.069	-.149	.088	.683
05. 「これは、自分にとってどうでもよいことだ」と気楽にとらえるようにする。(C)	.540	-.186	-.007	-.036	-.064	.604
18. できるだけ早く忘れようとする。(O)	.528	.162	.114	-.043	-.050	.742
28. 「何してもどうにもならない」と考え、ただじっと耐える。(P)	.516	.114	-.013	-.130	.061	.698
14. 時がたつて、自然に解決されるのを待つ。(P)	.460	.102	.110	-.065	.007	.663
24. そのことについて考えないようにする。(O)	.421	.030	.290	-.091	.035	.692
15. このような事態をまねいた自分の未熟さを悔やむ。(SE)	.040	.836	-.031	.021	.006	.745
02. こうなったのは自分の責任だ、と反省する。(SE)	-.025	.836	-.051	.055	-.088	.702
23. 自分の日ごろからの「心がけの悪さ」を反省する。(SE)	-.022	.826	.023	.033	-.032	.777
08. もう二度とこのようなことが起こらないように、このことを教訓として心に刻む。(SE)	-.044	.750	.183	.110	-.126	.542
07. ひたすら落ち込む。(P)	.080	.479	-.143	-.269	.341	
12. スポーツや遊びで気分転換をする。(E)	-.103	.026	.772	-.010	.094	.721
06. 自分の趣味に打ち込み、気分転換をする。(E)	-.059	-.070	.710	-.062	.045	.684
25. テレビを見たり、音楽を聴いたりしてそのことを忘れる。(E)	.203	.026	.569	-.026	.022	.740
20. 他のことに注意を向け、気をまぎらす。(E)	.297	.080	.423	-.003	.159	.710
11. なるべく他のことを考えるようにする。(O)	.264	.093	.421	-.071	.018	.650
10. いろいろな角度から、どうすればよいかについて考える。(A)	.076	-.017	-.043	.715	.118	.730
22. 「問題解決には何が必要か」についてじっくりと考える。(A)	-.036	.086	-.019	.687	.109	.764
17. 問題解決に必要なことに、集中して取りくむ。(A)	-.066	.064	-.065	.651	.137	.801
01. 解決にむけて自分なりに努力する。(A)	-.126	.098	-.097	.502	.035	.601
04. あまり悩みすぎないように気をつける。(O)	.092	-.103	.369	.450	-.336	
27. 誰かに助けを求める。(S)	-.057	-.011	.100	.075	.781	.760
21. 周囲の人からの同情や理解を求める。(S)	.080	.006	.005	-.076	.758	.649
03. 友人に相談する。(S)	-.025	-.157	.079	.202	.672	.581
13. 他の人に相談し、問題解決に必要なアドバイスを求める。(S)	-.000	-.049	.033	.362	.619	

		因子間相関					
因子名							()
第 因子	消極的受容	1.000					.908
第 因子	反省	.009	1.000				.848
第 因子	逃避	.465	.082	1.000			.872
第 因子	積極的取り組み	-.392	.103	-.133	1.000		.869
第 因子	サポートの要請	.131	.132	.116	.143	1.000	.810

目として設定していたものであり、いずれの項目からも事態の原因を自らに求め、反省することに関する共通の概念が見て取れる。第 因子は「反省」の因子と命名する。

第 因子 項目番号「12.スポーツや遊びで気分転換をする。」、「11.なるべく他のことを考えるようにする。」等が高い負荷を示している。この因子には逃避として設定した項目と忘却として設定した項目がひとつにまとまっている。しかし項目内容をよく検討してみると、そこには対処すべき課題から目をそむけ、一時しのぎにすぎないことに逃避してしまうことに関する共通の概念が見て取れる。そこで第 因子は「逃避」の因子と命名する。

第 因子 項目番号「10.いろいろな角度から、どうすればよいかについて考える。」、「22.『問題解決には何が必要か』についてじっくりと考える。」等が高い負荷を示している。この因子に負荷の高い項目は、全て当初、積極的対処測定項目として設定していたものであり、対処すべき課題に真っ正面から積極的に取り組むことに関する概念を表している。そこで、「積極的対処」の因子と命名する。

第 因子 項目番号「27.誰かに助けを求める。」、「21.周囲の人からの同情や理解を求める。」等が高い負荷を示している。この因子に負荷の高い項目は、全て当初サポートの要請測定項目として設定していたものであり、自らのサポートネットワークに、心理的・物理的援助を求めることに関する共通の概念が見て取れる。そこで「サポートの要請」の因子と命名する。

それから、分析1と同様の手続きで尺度の妥当性の検討を行った。まず、当初設定した因子構造と今回の分析から得られた因子構造とがほぼ一致していることを確認した。また大学院生5人の判定の平均得点はいずれの項目においても4.0を超えていた。そこで、妥当性は保たれているとした。

次に、分析1と同様の手続きで尺度の信頼性の検討を行った。その結果「当該の項目の尺度得点」と「その項目以外の尺度得点の総和」との相関係数はどの因子においても高い値を示し、全て $p < .01$ 水準で有意であった。また、係数も求めたが、全てが満足すべき高い値を示している。以上の結果から尺度の信頼性も保たれているとした。

それから本分析では、全ての場面を混みにして因子分析を行ったが、Table2に示されるその結果が各場面の因子の構造を正確に代表するものであるかどうかを確認しておく必要がある。そこで、斜行プロクラテス法を用いて因子間の一致性について調べることにした。分析方法は、以下の通りである。(a)項目分析において抜け落ちた項目のデータを削除する。(b)項目の所属する因子に1.0、それ以外の因子に0を入れたマトリックスを作成する。(c)それをターゲットにして、各場面ごとのデータ行列を斜行プロクラテス法により回転させる。(d)柴田・辻岡(1984)を参考に一致性係数を算出する。

Table 3 プロクラテス回転後の因子間の一致性係数

	対処方略因子				
	第 因子 消極的受容	第 因子 反省	第 因子 逃避	第 因子 積極的取り組み	第 因子 サポートの要請
進学場面	.931	.942	.882	.887	.920
友人場面	.965	.930	.980	.808	.879
学校場面	.979	.949	.918	.929	.746

結果はTable3に示す通りであるが、全てにおいて満足すべき高い値が得られたと言える。

さて、分析1における結果とは異なり、本分析で明らかにされた5つの対処方略はポジティブな意味合いを持つものからネガティブな意味合いを持つものまで多様である。そこで、今後の解釈の参考にするためその関係性についてとらえておく必要があると考え、各因子の因子得点を用いて再度因子分析を行った。なお、共通性の推定は主軸法、因子軸の回転にはバリマックス法を用いた。ただしプロマックス法を用いた場合も因子間相関は.007ときわめて低かった。Figure2に各5因子の2次元における配置が示されている。その結果「消極的受容」と「逃避」が「積極的取り組み」に対極する形で分かれ、そのちょうど中間あたりに「サポートの要請」と「反省」が位置しているのがわかる。

Folkman & Lazarus(1980), Lazarus & Folkman(1984)はストレス対処方略を問題中心型対処

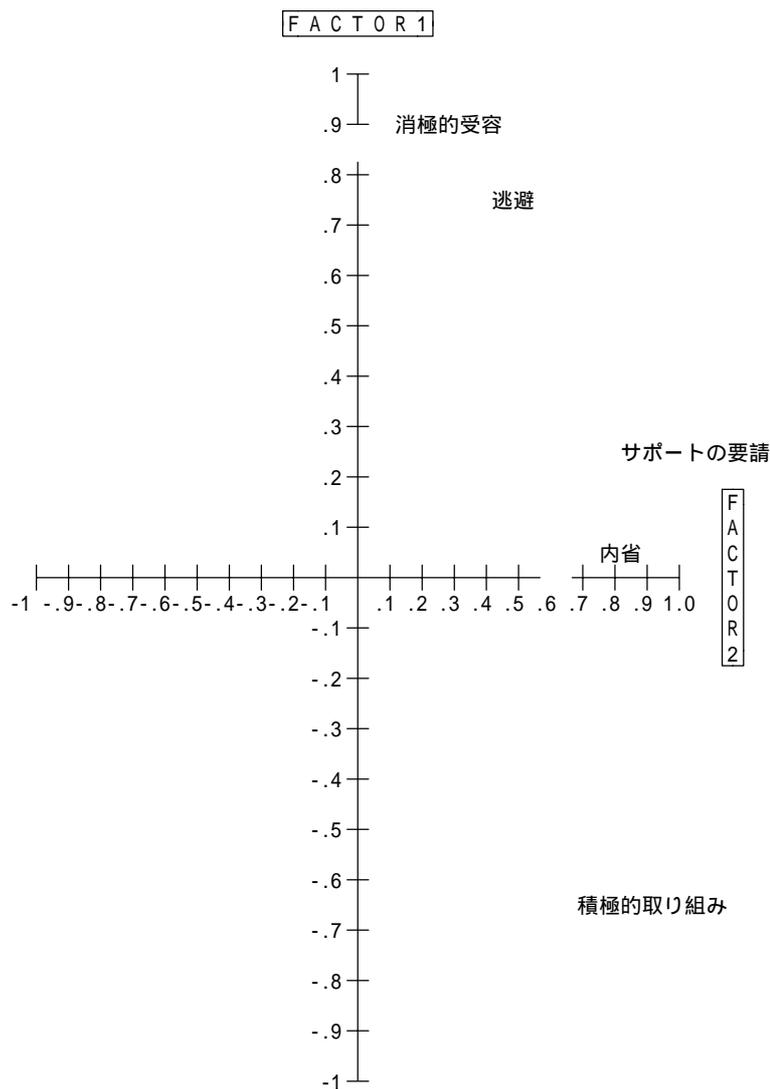


Figure 2 対処方略の2次元布置

(problem-focused coping：問題を中心に考え，外界に働きかける)と，情緒中心型対処(emotion-focused coping：自分の気持ちを安定させることに主眼が置かれ，自分の内面に働きかけることで，あるいは内閉することで対処する)に分類したが，本研究ではその項目内容から判断して「積極的取り組み」が問題中心型対処として，「消極的受容」と「逃避」が情緒中心型対処としてそれぞれ位置づけられるであろう。

分析 3 適応測定項目の分析

各ストレス場面における適応測定項目として，Table4 - 6 に示される項目を用いた。まず，友人場面における適応測定項目としては Table4 に示す 3 項目を使用した。各項目間の相関係数の値は .623 - .662 と全て $p < .01$ 水準で有意であり，また 係数を求めたところ .836 であった。そこで，これらの項目を友人場面における適応測定項目として使用した。同様に学校場面，進路場面の適応測定項目においても全て $p < .01$ 水準で有意な高い項目間相関が見られ，また 係数もそれぞれ .793，.753 と高い値を示した。そこで，各項目をそれぞれの場面における適応測定項目として使用することにした。

Table 4 友人場面における適応測定項目の項目間相関

項目内容	項目番号		
	1	2	3
1.友人たちとの関係はうまくいっている。	1.000		
2.友人と一緒にいるのは楽しい。	.662	1.000	
3.私は、いい友人に恵まれていると思う。	.623	.645	1.000

註：すべて $p < .01$ 水準で有意

Table 5 学校場面における適応測定項目の項目間相関

項目内容	項目番号		
	1	2	3
1.私はこの学校の一員であることに誇りを感じている。	1.000		
2.この学校に入学できたことは、幸せなことだと思う。	.642	1.000	
3.私は、学校生活がとても楽しい。	.582	.452	1.000

註：すべて $p < .01$ 水準で有意

Table 6 進路場面における適応測定項目の項目間相関

項目内容	項目番号		
	1	2	3
1.私は、自分の進路についてしっかりとした考えをもっている。	1.000		
2.私は、自分の進路についていつも真剣に考えている。	.706	1.000	
3.私には、明るい未来がまっていると思う。	.405	.370	1.000

註：すべて $p < .01$ 水準で有意

分析 4 達成動機、ストレス対処方略および適応の 2 次因子分析

調査に用いた 3 変数間の関係をとらえるため、各変数の合計得点をもとに樋口(1995a,1996a)の方法を用い、2 次因子分析を行った。多変数間の影響の流れをとらえるための分析としては、パス解析なども考えられるが、パス解析の場合、達成動機と適応の関係については、対処方略を媒介に間接的な推定を行うことしかできない。また、変数間の関係が複雑なため、パスの数がひとつの場面につき 30 にも及んでしまう。そこで、今回のデータの分析には不適切と判断した。

さて、達成動機に関してはいずれの場面においても共通の得点を用い、ストレス対処方略と適応に関しては場面ごとの得点をそれぞれ用いた(脚註 2)。Table 7 - 9 に各場面ごとの分析結果を示す。全体的に見て、友人・進路場面においては第 1 因子、学校場面においては第 2 因子が適応に関する次元であり、各場面におけるもう一方の因子が適応と関係しない次元と言えるだろう(以後便宜的に、適応次元、不適応次元とそれぞれ略する)。なお、解釈を容易にするため因子負荷量が .4 を超えるものには囲みを入れた。

まず問題 1 についての知見を得るため、ストレス対処方略と適応の関係に目を向けることにする。対処方略第 1 因子の消極的受容はどの場面においても適応次元にマイナスの、不適応次元にプラスの負荷を示している。

Table 7 友人場面での2次因子分析結果

変数名	因子負荷量	
達成動機		
課題への取り組み	.506	.035
イニシアティブ	.139	.182
学習	.374	.296
競争	.030	.256
活動の合理化	.455	-.131
友人場面ストレス対処方略		
消極的受容	-.579	.573
反省	.581	.218
逃避	-.036	.785
積極的対処	.847	.055
サポートの要請	.400	.493
友人場面適応	.473	.214

註：因子間相関は-.207

Table 8 学校場面での2次因子分析結果

変数名	因子負荷量	
達成動機		
課題への取り組み	-.308	.438
イニシアティブ	-.319	.323
学習	-.103	.530
競争	-.002	.254
活動の合理化	.085	.417
学校場面ストレス対処方略		
消極的受容	.774	-.144
反省	.677	.118
逃避	.747	-.054
積極的対処	-.325	.611
サポートの要請	.536	.468
学校場面適応	.242	.676

註：因子間相関は-.092

Table 9 進路場面での2次因子分析結果

変数名	因子負荷量	
達成動機		
課題への取り組み	.540	-.010
イニシアティブ	.289	.140
学習	.612	.124
競争	.401	.085
活動の合理化	.327	-.079
進路場面ストレス対処方略		
消極的受容	-.437	.568
反省	.648	.199
逃避	-.027	.759
積極的対処	.681	-.202
サポートの要請	.130	.709
進路場面適応	.665	.073

註：因子間相関は-.207

このことから、事態改善のための努力をせずあるがままに受け入れてしまうことは不適応と結びつくことがわかる。対処方略第 因子の反省は、友人および進路場面では適応次元にプラスの負荷を示しているが、学校場面においては逆に不適応次元に対しプラスの負荷を示している。このことは次のように解釈できる。つまり進路場面におけるストレス状況は自分の勉強不足に起因するものであり、友人場面においてもトラブルの原因がどちらにあるのかはあやふやであるにせよ、その原因を自分に求めることも可能である。反省は自分に原因があるとき、あるいはあるかもしれないときには効果的な対処となり適応と結びつくのである。しかし、学校場面におけるストレス状況は本人に起因する(努力不足や不注意)ものでなく偶然舞い込んできたものであるため、深く反省することに意味はない。このような状況における反省は過去を教訓として役立てるという機能として働くのではなく、くよくよ悩んでいるだけでしかないのかもしれない。そこで適応とは関係せず、逆に不適応と結びつくのであろう。対処方略第 因子の逃避は、どの場面においても不適応次元に高いプラスの負荷を示し、一方適応次元には高い負荷を示していない。状況から目をそむけるという対処方略は所詮一時しのぎにしかすぎず、根本的な問題解決にいたることはないと言える。対処方略第 因子の積極的対処はどの場面においても適応次元に高い負荷を示している。ストレス状況に対し積極的に取り組むことが適応と強く関係するという結果は従来の研究結果(Mitchell, Cronkite, & Moos, 1983; Mitchell & Hodson, 1983)とも一致し、妥当な結果である。最後に、対処方略第 因子のサポートの要請は、進路場面において不適応次元に高いプラスの負荷を示す一方、他の2場面では適応・不適応両次元に高いプラスの負荷を示す、という他変数との複雑な関わりを見せている。このことは以下のように解釈できるかもしれない。つまりサポートの要請は、進路場面のような自分で解決するしか方法のないストレス場面においては適応と結びつくことがない。一方、他者の助けが有効なストレス場面(友人場面、学校場面)において友人等にサポートを要請することは高校生にとってごく一般的なことであり、達成動機や適応とは関係しないのである。

それから Figure2 における結果でまとまった消極的受容と逃避は不適応とはっきりと結びつき、その対極に位置した積極的取り組みは適応と結びつくが、反省とサポートの要請はその所属がはっきりしないことが Table7 - 9 に示された結果から見て取れる。そのようになったのは反省とサポートの要請が情緒中心型対処と問題中心型対処の中間的意味合いを持つからではなく、反省に関しては場面により情緒中心型対処になったり問題中心型対処になったりするからであり、サポートの要請に関しては達成動機や適応にあまり関係せず広く用いられる対処方略であるからと推測できる。この結果から、やはりストレス状況について自由に想定させ、そこで得られた対処方略と適応の関係を一般化することには問題があると言えるだろう。なぜなら、対処方略の中には文脈によりその性質を変えるものが存在するからである。また、対処方略と適応の関係について論じる際は個人差を考慮に入れる必要があるということもわかる。確かに分裂病の患者にとっては気晴らしや逃避が適応に対し有効な対処方略となる(岩井, 1994)といったことがあるかもしれないが、そのような臨床的サンプルから導かれら結果を一般化してはならないのである。

次に問題2に関する知見を得るため、調査に用いた3変数の関連に対し目を向けることにする。達成動機第 因子の課題への取り組みは全ての場面において適応および適応につながる効果的な対処と正の関係を示しているのが見てとれる。このことからストレス状況に適応するためには与えられた課題に積極的に取り組もうとする動機、つまりある種の一般的なエネルギーが必要であるということがわかる。また第 因子のイニシアティブは達成動機の中で唯一どの場面においても適応に関する次元に高い負荷を示すことがなく、人を引っ張っていきたいという動機が少なくともここで用いられたストレス場面においては、効果的な対処および適応を導く源にはなりえないと解釈できる結果が示された。それから、進路場面と学校場面においては達成動機第 因子の学習が適応および適応を導く効果的な対処と関係している。このことは、学習に対する動機が高いことは学校を大事に思っているという価値観と結びついており、勉強の場である学校におけるストレス状況をうまく解決し学習しやすい環境を作るよう働き、様々な精力的でかつ効果的な対処を引き出していると解釈すること

ができるかもしれない。達成動機第 因子の競争は進路場面においてのみ適応と関係している。このことは、進路場面、つまり大学に進学するかどうか、あるいはどの大学に行くのかという問題は他者(知人、未知の人含めて)との競争を含む状況であり、このような競争場面において効果的な対処方略を引き出しそして適応する(自分にとって良い状況をつくりだす)ためには、人に負けたくない、勝ちたいという競争性が必要であることを表していると解釈できるだろう。この解釈は、競争に対する動機が競争的状况でない他の2場面においては適応と関係していないということからも適当であると思われる。達成動機第 因子の活動の合理化は、進路場面において.4をやや下回っているものの他の場面では比較的適応次元に高い負荷を示しており、物事に対し計画的に取り組もうとする動機が効果的な種々の対処方略、および適応と結びついていることがわかる。全体的に、達成動機が場面ごとに効果的な対処方略を引き出し、ひいては適応にいたるという Figure1 のモデルを支持する方向の結果が得られたと言える。

それから、いずれの場面においても不適応次元に対して達成動機が高い負荷を示すことはなかった。達成動機の低い状態とは精神的エネルギーを必要とすることへの対処を避ける状態であり、ストレスの解消を求められるような状況にあっても効果的な対処方略がとれず、従って適応にいたることができないという Figure1 に示したモデルを支持する方向の結果がここでも示されたと言える。

まとめ

本研究においては、私立高校の男子生徒 154 人を被験者に用い、達成動機、ストレス対処方略、適応という 3 変数の関係について場面ごとに調査を行った。質問紙法による調査の結果、以下のことが明らかになった。

1. 健常者においては一般的に、ストレス場面で対処方略の「積極的取り組み」を用いることが適応につながり、一方「消極的受容」、「逃避」を用いることは適応につながらないということが明らかになった。また、「反省」および「サポートの要請」は場面の性質により適応に対する関係が異なっていた。

2. 全体として、適応を求められるようなストレスに満ちた状況におかれたときは、それに取り組み自分の力で統制しようとする達成動機(各場面におけるストレスを解消するのに適している達成動機)が必要であり、それが効果的な対処方略を導き、ひいては適応へとつながっていく、と解釈できる結果が示された。これはモデルを支持する方向の結果である。

それから、達成動機が低い場合は、適応を求める環境からの働きかけ(ストレス状況)に対して消極的で逃げの姿勢しかとれず、その結果適応にいたることができない、と解釈できる結果が示された。これもまた、モデルを支持する方向の結果である。

引用文献

- Aldwin,C.M., & Revenson,T.R. 1987 Does Coping Help? A reexamination of the relation between coping and mental health. *Journal of Personality and Social Psychology*,53,337-348.
- Cassidy,T., & Lynn,R. 1989 A multifactorial approach to achievement motivation:The development of a comprehensive measure. *Journal of Occupational Psychology*,62,301-312.
- Cohen,F. 1987 Measurement of coping. In S.V. Kasl., & C.L.Cooper(Eds.), *Stress and health:Issues in research methodology*. England:John Wiley & Sons. Pp.283-305.
- Folkman,S., & Lazarus,R.S. 1980 An analysis of coping in a middle-aged community sample. *Journal of Health and Social Behavior*,21,219-239.
- Folkman,S. 1984 Personal control and stress and coping processes:A theoretical analysis. *Journal of*

- Personality and Social Psychology,46,839-852.
- Folkman,S.,Lazarus,R.S.,Gruen,R.J.,&DeLongis,A. 1986 Appraisal,coping,health stress,and psychological symptoms. Journal of Personality and Social Psychology,50,571-579.
- 樋口康彦 1995a 組織の 4 要因が従業員の達成動機に与える影響について 大卒男子従業員の意識調査から
応用心理学研究,20,11-22.
- 樋口康彦 1995b 他者のイメージが達成動機に与える影響について モデリング理論の観点から 関西大
学
大学院『人間科学』,42,167-187.
- 樋口康彦 1996a スポーツ集団における組織要因とメンバーの達成動機との関連について 実験社会心理学
研
究,36,42-55.
- 樋口康彦 1997 性役割認知が達成動機に及ぼす影響(1) 大学生男女を被験者として 青年心理学研
究,9,19-30.
- 一谷 彊・相田貞夫・水谷 昭 1990 中学生の学校生活への充実感に関する教育心理学的研究(3) 京都教育
大学紀要(人文・社会),77,1-25.
- 岩井圭司 1994 分裂病における対処行動 陽性症状への“対抗”を中心として 精神科治療学,9,939-946.
- Jackson,D.N.,Ahmed,S.A., & Heapy,N.A. 1976 Is achievement a unitary construct?. Journal of Research
in Personality,10,1-21.
- Jemmott,J.B., & Locke,S.E. 1984 Psychological factors,immunologic mediation,and human susceptibility
to infectious diseases:How much do we know? Psychological Bulletin,95,78-108.
- 梶田叡一 1970 目標達成 適応機能 問題解決 Coping 理論に関する覚え書き 国立教育研究所紀要,75,1-12.
- Latack,J.C. 1986 Coping with job stress:Measures and future directions for scale development. Journal
of Applied Psychology,71,377-385.
- Lazarus,R.S., & Folkman,S. 1984 Stress,appraisal,and coping. New York:Springer Publishing Company. 本
明 寛・春木 豊・織田正美(監訳) 1991 ストレスの心理学 認知的評価と対処の研究 実務教育出版
- McCubbin,H.I.,Dahl,B.B.,Lester,G.R.,Benson,D., & Robertson,M.L. 1976 Coping repertoires of families
adapting to prolonged war-induced separations. Journal of Marriage and the Family,41,461-471.
- Mitchell,R.E.,Cronkite,R.C., & Moos,R.H. 1983 Stress,coping,and depression among married couples.
Journal of Abnormal Psychology,92,433-448.
- Mitchell,R.E., & Hodson,C.A. 1983 Coping with domestic violence:Social support and psychological health
among battered women. American Journal of Community Psychology,11,629-654.
- Murray,H.A.(Ed.) 1938 Explorations in Personality:A clinical and experimental study of fifty men of
college age. New York:Oxford University Press. 外林大作(訳編) 1961 パーソナリティー(上・下) 誠
信書房
- 内藤勇次・浅川潔司・高瀬克義・古川雅文・小泉令三 1987 高校生用学校環境適応感尺度作成の試み 兵
庫教育大学研究紀要,7,135-145.
- 二宮克美・大野 久 1990 学校生活における青年 久世敏雄(編) 変貌する社会と青年の心理 福村出版
Pp.157-182.
- 坂田成輝 1989 心理的ストレスに関する一研究 コーピング尺度(SCS)の作成の試み 早稲田大学教育学
部

学術研究(教育・社会教育・教育心理・体育学編),38,61-72.

坂柳恒夫・竹内登規夫 1986 進路成熟態度尺度(CMAS)の信頼性および妥当性の検討 愛知教育大学研究報告(教育科学編),35,169-182.

柴田 満・辻岡美延 1984 確認的因子分析における因子的不変性の評価 関西大学社会学部紀要,16,91-132.

大野 久 1984 現代青年の充実感に関する一研究 現代青年の心情モデルについての検討 教育心理学研究,32,100-109.

脚注1: 本論では便宜的に適応および不適応と言及することがあるものの,それは被験者の中での相対的な位置関係を示しているにすぎない。今回の被験者の場合,全員が通常の高校生活を送っていることから病的にとらえられるべき不適応者は存在しない。それゆえに,ここで言及する適応とは充実感・満足感を抱いている状態,一方不適応とは,いわば充実感・満足感の乏しい状態,あるいは相対的な適応不良とでも表現すべき状態のことを指す。

脚注2: 達成動機と対処方略に関しては分析1・2における項目分析の結果残った項目のみで因子分析を行い,その結果を基に算出した因子得点を用いた。適応測定項目に関しては,各項目の尺度得点を用いた。